

<論文> 『江口』の遊女と普賢菩薩との同一性 ： 女人救済の問題を中心に(後編)

植野, 慶子 / ウエノ, ケイコ

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

48

(開始ページ / Start Page)

94

(終了ページ / End Page)

104

(発行年 / Year)

1993-12-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019696>

『江口』の遊女と普賢菩薩との同一性

——女人救済の問題を中心に——（後編）

植野慶子

目次

はじめに

第一章 仏教に見る女性の存在

第二章 女人成仏の謡曲中の救済

第三章 作品研究『江口』

第一節 詞章① “水”が意味するもの

第二節 詞章② “月”が意味するもの

第三節 普賢菩薩とは

(一) 普賢菩薩とは

(二) 『江口』に見られる普賢菩薩の衆生教化

第四節 遊女普賢化現に関する諸見解

第五節 『江口』の救済の図式

おわりに

注及び参考文献

(二) 詞章② “月”が意味するもの

この世の闇を照らす月は、仏教では「真如の月」である。煩惱に満ちた人間世界を照らし、衆生を悟りへと導く光なのである。^(注13)

『日本仏教語辞典』^(注14)によると、真如は——サンスクリット語のカタター「真実、ありのままの状態」の訳。「常住不変の真実」をいう。謡曲では「真如」を月に喩えることが非常に多く、これは真如の道理が迷妄を晴らすことを月が闇を照らすのに喩えている——と、説明されている。事実、謡曲では

跡のしるべの燈は 真如の秋の月を見する (『砧』)

通ふ心の浮き雲を 払ふ嵐の風のままに真如の月も晴れよとぞ

(『夕顔』)

菜摘の川の水清く 真如の月の澄める夜に (『嵐山』)

というような、真如を月に喩えるものが多い。

『江口』でも「月」が頻繁に出てくるが、真如の月という言葉そのものは見当たらない。だが、直接言葉にされていなくとも、真如

の月という意を持つものであるのではないかと私は考えている。では、順を追って見ていこう。

(1)月は昔の友ならば 世の外いづくならまし^(註15)

ここでの月は、不変の象徴である。僧が在俗時に見ていた月と、出家した今、見ている月とは全く同じである。今も昔も月は全く変わっていないのだという、不変性を表している。

(2)月澄みわたる川水に……

月が澄みわたっている水面に、遊女が舟遊びをしている。遊女は、ある種の“花”を持つ。そんな華やかさを月は照らしているのだから。

(3)月に見えたる不思議さよ

これはワキ僧の言葉なのだが、一体何が不思議なのだろうか。江口の君を成仏させようと吊っていたら、どこからともなく遊女が現れて来て、舟遊びをしていることが不思議なのか。それとも、月は過去と現在、聖と俗という区別をしない。全てを遍く照らしているのだという不思議さか。ここで私は後者に留意しておきたい。なぜなら、この「区別しない」ということは、僧の迷妄を晴らすことへつながっていく考え方だからである。(6参照)

(4)不思議やな月澄みわたる水の面に……

月が澄んでいるということは、月が闇を照らしていることである。この場で月に照らされている闇とは、遊女と僧である。遊女は、まさに夜(闇)そのものであり、僧は心に迷い(闇)を抱いている。月は、そのような二つの闇を照らしているのである。

(5)月の夜舟をご覧よ

この言葉は、今一度、世俗の世界をふり返ってみなさいと言って

いることになるのではなからうか。ここでの世俗の世界とは、遊女そのものを見ることである。そして、この一言により、遊女は僧を自分の世界へと引き込んでいくことになる。実際は、場面自体は何も変わらないが、これ以降、感覚的に僧を悟りへと導く世界が展開されるのである。つまり、この言葉はシテがワキを悟りへ導こうとする意識の表れと読みとれるのである。と同時に、月が象徴的に場面転換の役割をしているのである。冒頭での月も、後場の最初の月も、今どのような場面であるのか(いつ・どんな場所にいるのか)を告げているし、ここでも、シテがワキを悟りへ導く世界に引きこむきっかけとなっている。この一言には、このようにシテのワキ救済という意識の表れ・月による象徴的な場面転換という、二つの大きな役割があるのである。

(6)月は昔に変わらぬや

先述の通り、月は昔と全く変わっていない。では、昔のままの月とは何なのかを考えてみたい。

① 直前にワキが「江口の遊女とは遠い昔のこと」と言ったのに対して、「昔のこととは限りません、月は昔と変わらずあるではありませんか」といっている。つまり、過去→現在と時間を超越する働きをしている。

② 間接的に、僧に「月はあなたが出家する前も、出家した現在も変わっていない」と言っている。

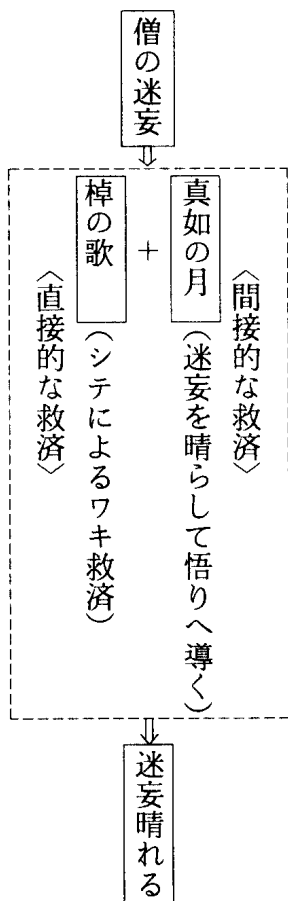
③ 月には今も昔もない。それと同じに、出家前の世界(世の中)と、出家後の世界(世の外)という区別もないと悟っている。

ここでの月もまた(5)同様に、月そのものがやはり象徴的な場面転換を表し、(①)、月を引き合いに出して、シテがワキの迷妄を晴ら

そうとすることの表れ (②③) となっているのである。

(7) 月も影さす棹の歌

これから後、月の光がさす下で棹の歌が歌われる。月の光——煩悩に満ちた人間世界において、衆生の迷妄を晴らし、悟りへと導く光——まさしくこれは、真如の月である。事実、棹の歌を聞いた後に僧の心の迷いも晴れている。つまり、棹の歌は江口の君の衆生救済の方便となっているのである。



(8) 花よ紅葉よ 月雪のふることも あらよしなや

伊藤正義氏によると、この解釈は「風月の景に心を動かすことも無益だ、の意をこめるが、前場の贈答歌にこだわることも、しよせんつまらぬことだ、というのが主意。そして、ここ以下に到って僧は大悟に導かれる」となっている。

「こだわることは、つまらないことなのです。」これが、僧の迷いに対して江口の君が与えた答えなのである。僧がこの悟りに導かれるにあたって、二つの方便があったことは重要である。一つは前述の通り、棹の歌。もう一つは、月である。他分、終曲の時点でも月はまだ出ているのであろう。冒頭の次第から始まって迷妄が晴れた今に至るまで、月はずっと僧を照らし続けていた。月は、僧の心

の闇(迷妄)を照らし続け、終にはその闇を晴らしたのである。真如の月という言葉そのものは使われていないが、『江口』において月は、真如の月として僧を照らし続けていたと言っても間違いないと、私は確信している。

ここで今一度、月が意味するものをまとめておこう。改めて言うまでもなく、月は不変性を表し、時間や聖俗の区別なく全てを遍く照らしていた。また、象徴的に場面を転換する効果を奏し、更には真如の月として間接的に僧の迷妄を晴らし悟りへと導いたのである。加えて、江口の君の衆生救済の手段としての役割を担っていた。(彼女は度度「月」を口にし、その都度、僧の迷妄を晴らそうと試みていた。)『江口』において、月が一つのキーワードになっているのは確かだろう。

ところで、私は第一節の最後で、水と月は実に対照的だと述べたが、このことについては是非とも記しておきたいことがある。

既に第一章で詳細した通り、水は河竹の流れの身を表現し、(舟は)時間の流れを象徴し、江口の遊女が普賢菩薩へと化現するにあたっての襖を感覚的に暗示するといった役割を持っていた。これらは皆、時を変え、場所を変え、姿を変え、変化しているものである。それに対して月は、本項で述べたような意味を持ち、構成及び主題につながっていく言葉となっていた。そして、真如の月・シテの衆生救済により導かれた真理——すべては迷う心から生じる。故に、仮りの宿に心留めず、六根清浄であれ——は、常住不変の真実である。つまり『江口』において、水は河竹の流れの女をはじめとして、変化しているもの(無常変化)を表し、月は真理(常住不変の真実)を表していたのである。水・月とも、それぞれに複数の意味がある

ために、両者をただ対照的なものとしてとらえ、切り離して考えがちだが、この二つの言葉の裏には、作品全体を包括・象徴するような大きな概念が隠されていたのだと私は思う。そしてこの二つの対照的な概念が、「水」と「月」という言葉に記号化され、巧みに織りまぜられているところに、『江口』の詞章の美しさがあるのだろう。

(三) 普賢菩薩とは

ところで、江口の遊女が化現した普賢菩薩とは、どのような菩薩なのだろう。数多くの諸仏諸尊の中から普賢菩薩を選んだのはなぜなのか。本節では、その理由を追求していくこととする。

(一) 普賢菩薩とは

『日本仏教後辞典』によると「普賢は、菩薩の一。白象に乗った、釈迦牟尼仏の向かって右側の脇侍で、仏の教化、衆生済度を助ける。」とある。『仏教文化事典』^(注17)には、「普賢菩薩は、仏の理法や行願を象徴すると考えられ、行あるいは理の菩薩といわれる。普賢菩薩は、あまねく一切の所に現れ、方便をもって人々を教化する菩薩で、これが文殊を智の菩薩と呼ぶのに対して、普賢を行願の菩薩と呼ぶ所以である」と説明されている。

右記の内容は、いささか抽象的な説明なので、もっと具体的に普賢菩薩を知るためにも、法華経に目を向けることにしよう。

法華経二十八品の最終章に「普賢菩薩勸発品」がある。また、これと表裏一体を成す経典として、法華三部経の結経である「観普賢

菩薩行法経」(以下、観普賢経と略す)がある。この二つの経典を読むとわかるように、普賢菩薩は次の働きを具現した菩薩なのである。

- (1) 自ら法華経の教えを実行する。
- (2) 法華経の教えを、あらゆる迫害から守護する。
- (3) 法華経の教えを実行するものが自ら招く功德と、それを迫害するものが自ら招く罰を証明する。
- (4) 法華経の教えにそむいたものも、懺悔することによって罪から解放されることを証明する。

普賢菩薩の乗り物である六牙の白象だが、普賢菩薩勸発品に「我爾時乘六牙白象王」とあるが、『法華経』^(注18)の注によれば、「六牙とは、六波羅蜜、或は六神通、或は六根清浄を表す」となっている。また『法華経の新しい解釈』^(注19)には、「象は『偉大なる実行力の象徴であり、六本の牙は六波羅蜜を表すという。仏の使いといわれる六牙の白象に乗って出現する普賢菩薩は、偉大なる法の実行者の象徴である。』と説明がある。

これで、普賢菩薩についての予備知識を得られたことと思うが、次は観普賢経をもとに『江口』における普賢菩薩の衆生教化について考えてみたい。

(二) 『江口』に見られる普賢菩薩の衆生教化

先に私は詞章②の中で、シテによるワキ僧の救済という見解を示した。しかし、私が思うに『江口』の主題はこれだけではなく、実はその裏にもう一つの主題が隠されているのである。それが、普賢菩薩の衆生教化なのである。私がこの主題を見出す論拠となったの

が、観普賢經にある懺悔の教えである。^(注22) 観普賢經は、法華經を実生活に生かすための具体的方法を説いた教えで、別名、懺悔經とも呼ばれる。観普賢經は、一般的な意味での懺悔を説くというよりも、むしろ自分の仏性を磨きあげる行としての懺悔を徹底的に教えている經典なのである。庭野日敬氏は、その著書『法華經の新しい解釈』の中でこの經典の要点を説明しているが、庭野氏の解釈をもとに観普賢經と『江口』とを照らし合わせていくと、「江口は、観普賢經の教えを盛り込んでいるのでは」という印象を強く受けるのである。それも『江口』のある一部分に見受けるのではなく、作品の構想そのものに顕著に表れているのである。本項では、観普賢經の教えを庭野氏の言葉を借りて説明し、『江口』に表れている観普賢經の教えを明らかにしていきたい。

まずは、本説との関わりからふれておこう。

「目を閉ざれば則ち見、目を開ければ則ち失う」という文句だが、庭野氏の解釈によると次のような意になる。

ある程度の境地に達しても、仏と共にいるという自覚を得ても、その自覚はまだはつきりしない。目を閉じて静かに精神を集中すれば、確かに仏と共にいることを実感できるが、目を開いて現実の世界を見わたすと、もう仏の姿はどこか遠くへ霞んでしまう。

『古事談』^(注23)には「性空が生身の普賢菩薩を見たいと祈請していたところ『神崎の遊女の長者を拜め』とのお告げがあり、神崎へ赴く。性空が目を閉じていると、長者は普賢菩薩で六牙の白象に乗って眉間から光を放っているのだが、目を開けるとまたもとの長者が見えるばかりである。」という説話があり、『十訓抄』^(注24)にも同様の説話が

ある。また『撰集抄』^(注25)にも「六根清浄を得たものの、生身の普賢菩薩を拜みたいと思っていた性空に『室の長者を見よ』というお告げがあり、性空が『これは生身の普賢菩薩である』と思い、目を閉じて心を静めて観念すると、生身の普賢菩薩が白象に乗っている姿が見え、目を開けると遊女の長者であった。そしてまた、目を閉じて心を法界にすますと、長者は普賢菩薩の姿であるのだった。」という説話が寄せられている。性空は常々、生身の普賢菩薩を見たいと思っており、遊女の長者を前にするといよいよその思いは強くなり、目を閉じて心の中で強く念じていたからこそ、遊女の本当の姿である生身の普賢菩薩を見ることができた。しかし「はっ」と思って目を開けると、現実には遊女であった。つまり性空のようにある程度の境地に達した人でも、目を閉じて精神を集中しないと、現実世界の事象にとらわれて、目の前にある仏の姿も見えないのである。このように、本説にも観普賢經の教えは、はっきりと記されているのである。

では実際に『江口』ではどうなのか。観普賢經には、次のような教えが説かれている。

真理を迷いや罪によって覆い隠しているものは、光を受けても光らない。だから、懺悔によって迷いや罪をぬぐい去らねば、いつまでも醜い姿でいるわけになる。そこで、普賢菩薩が懺悔の心を起こさせると、今まで自分のいた暗い世界が急に明るくなったような大きな悟りを得るのである。」

これは『江口』の主題にも通ずるものがあると思う。ワキ僧は「世の外いづくならまし」という迷いを持っていたが、江口の遊女に悟されて、その迷いも晴れる。と同時に、江口の遊女は普賢菩薩

となつて昇天してしまう。つまり、僧は心に迷いがあつた故に眞理が見えず、江口の遊女を見ても醜い姿（遊女）としか見えなかつた。しかし、シテに悟された（世の外などないのだと、懺悔の心を起こさせた）結果、僧は大きな悟りを得、ものの本当の姿（遊女ではなく、普賢菩薩）を見ることができたのだと、解釈できるのである。

また、観普賢經は次に示すような懺悔の心についても説いている。自分は長い間、不完全な見方でものを見てきた。また、目の前の現象に迷つたり、執着することを繰り返してきた。現象に惑わされて、眞実を見る目がくらまされていたのだ。こうして煩惱に追われているために、物事の実相がまるっきり見えないようになつてしまった。つまり、目の前のことしか見えないという原因と、実相に対して盲目になるという結果がいつまでも循環して、どうしても迷いの世界から逃れることができなかった。

『江口』においても、この考え方は認められる。曲中の歌をもとに説明したい。

まずは、ワキ僧の「月は昔の友ならば 月は昔の友ならば 世の外いづくならまし」だが、ワキ僧はこの世に執着し、現象に惑わされていたからこそ、〈世の外などないのだ〉という実相が見えず、迷いの世界から逃れられずにいたのである。次に、かつて西行が詠じた「世の中を厭ふまでこそ難からめ 仮りの宿りを惜しむ君かな」という歌。西行もまた、ワキ僧と同様に目の前の現象に惑わされていたのではなからうか。宿の主人が西行に宿を貸さなかつたのは、単に宿を貸すのを惜しんだからではない。主人の仮歌「世を厭ふ人とし聞けば仮りの宿に 心留むなと思ふばかりぞ」の眞意は、世を

捨てた方だというから、こんな仮りの宿に執着なさるなであり、執着するなど言つたのは、世捨て人を思いやる心からであつた。そのような主人の眞意を汲みとれず、一夜の宿を惜しんだだけのことと解釈してしまつたのは、西行が一夜の宿に執着していた表れと、受けとれないだらうか。執着していた故に、眞実を見る目がくらまされて、〈この世は所詮、仮の宿である〉という実相が見えなかつたのである。『江口』のこの二首の歌は、衆生はこんなにも世のものに執着し、煩惱に追われ、実相が見えにくい、故に迷いの世界から逃れられずにいるのだということを表しているのではないかと、考えられるのである。

さらに観普賢經は、六根の懺悔を説いた後、左記の懺悔の法を説いている。

心を観じてみると、定まつた心というものはない。それは顛倒の想から起こるものであり、この心は妄想から起こるのだ。

（中略）こう懺悔して心をよく観察してみると、心だと思つていたのは本当の心ではなくて迷いの雲にすぎず、世の中の全ての物事も、本当にしつかりした実在でないことが分かつてくる。本当の実在というのは、そういう眼前の現象の迷いから解脱したところに見い出せるものであり、あらゆる煩惱を滅し去つた所に存在するものであり、それこそ不変のものである。このことをしつかり考えるのが大懺悔であり、変化するものにとらわれる心をなげうって、不変のものを一心に心に念ずることである。こういう懺悔を続けていけば、その人の身も心もすつかり清浄になり、この世の様々な出来事にもとらわれなくなる。

『江口』でこの教えを一番明確にしているのは、特にサシから終曲

にかけての詞章である。サシの「顛倒迷妄してまだ解説の種を植ゑず」や、クセの「ある時は色に染み……六塵の境に迷ひ 六根の罪を作ること 見ることに聞くことに 迷ふ心なるべし」で、衆生が抱く迷いの心を取りあげ、さらに終曲へと展開する詞章で、この世の様々な出来事にとらわれないためにも、この仮りの宿に心を留めてはいけなさと、さかんに悟しているのである。つまり、「仮りの宿に心留むな」と、眼前の現象に執着してはならないというのが、僧の迷妄に対する答えなのである。そして、現象に執着せずに不変のものを一心に心に念じ、懺悔を続けていけば、もはや六塵の境に迷うことも、六根の罪を作ること、迷う心もなくなり、六根清浄となるのである。このことこそ、普賢菩薩（江口の遊女）が衆生（僧）に一番伝えたかったことなのである。

もうこれで『江口』において普賢菩薩が衆生教化していることは明白であろう。そして、この論拠となっているのが、今述べてきた観普賢菩薩行法経なのである。右記に引用してきた部分の要点をまとめると次の通りである。

- 。 迷いをぬぐい去らないと真の姿は見えず、いつまでも醜い姿である。
- 。 煩惱に追われて実相が見えず、迷いの世界からも逃れられなかった。
- 。 本当の实在は、眼前の現象の迷いから解説したところに見いだされる。
- 。 大懺悔を続けていけば、六根清浄になり、現象にもとらわれなくなる。

このような観普賢経の教えが盛り込まれているからこそ、普賢菩薩

の衆生教化（シテの遊女によるワキ僧の救済）が明確になり、遊女の普賢菩薩への化現も決して全く意味のない大胆な化現ではなくるのである。つまり「遊女が普賢菩薩であった」という、ものの実相が見えたとすぎないのだから、ごく当たり前のことと納得できるのである。

私は遊女が普賢菩薩に化現したことについてこのように考えているが、他にはどのような見解があるのだろうか。次節では、諸氏の論をとりあげながら、さらに考察を進めていきたい。

（四）遊女普賢化現に関する諸見解

江口の遊女が普賢菩薩へと化現したことについては、実に様々な見解がある。ここではそのうちのいくつかを紹介したい。

。 松岡心平^(註26)氏

江口のキリには、実は仏教的世界観に浸されからめとられた後の遊女達のあはれにもはかない救済願望と、これにこたえる仏教僧側からの救済の手の変遷の歴史が重畳し、また凝縮している。（中略）専修念仏による今様住生ということ、江口の遊女長の歴史的背景は一応説明できる。遊女の長の頓滅を世阿弥は、普賢菩薩となって西の空へと消え去る遊女のイメージを仮構し持ちこんだ。

。 松岡心平^(註27)氏

江口の遊女の長者が歌舞の菩薩となって昇天していくというのは、単なる変身にすぎず、ドラマとして弱い。そこで世阿弥が考えたのは、遊女の死を逆手にとる終曲の構想だった。

。 筒井曜子氏

詞章①参照のこと

。堀口康生氏^(注28)

執着を離れた時、僧は「世の外」など何処にも存在しないことに
気付くはずである。語り終えた彼女は、そのまま本性を現す。(中
略)「江口」の僧の迷妄の晴れた瞬間、遊女は普賢菩薩とあらわれ
得たのだ。

。阿部泰郎氏^(注29)

遊女が普賢へと変化するイメージの詩的表象であるところのこの
変容は、時にとり場に依じての歌いかえとして、今様そのものが本
質的にはらむ芸能上の特質であった。(中略)普賢影向という聖な
るものの顕現は、かような法文歌——今様の担い手たる遊女自身
の上になされるわけである。(中略)遊女が聖なるものとして顕現
するということが、この能において本説の物語や歌を重層的に組み
合わせた上で、それをくぐりぬけたかたちで見事に実現されている。

。佐伯順子氏^(注30)

『江口』は夢幻能の特権、すなわち彼岸と此岸を夢の中にきり結
ぶことで、遊女が「死んだ」というあからさまな表現をまぬがれつ
つ、彼女を西方往生させた見事な文学的結晶である。それは同時に
「死して他界へ転生する遊女」というモチーフの原点となり、後代
へとひきつがれてゆくだろう。

右にあげた諸氏の見解を簡単にまとめると、遊女の普賢化現は、
遊女の死を普賢菩薩の昇天にイメージさせる・禊の結果としての化
現・僧の迷妄を晴らすと同時に本性を現す・今様の持つ芸能上の特
質の表れとなるだろう。ここで私は二点、特筆しておきたい。一つ
は、遊女の死を普賢菩薩の昇天にイメージさせるという点だが、遊

女の死を処理するためだけに普賢菩薩と化したのだろうか。私には
そう思えない。それだけのために化現したのなら、さかんに「仮り
の宿に心留むな」と僧を悟す遊女をどう説明したらよいのか、なぜ
普賢菩薩でなければならぬのか、といった疑問を解消できないの
である。また、本説で遊女が死んでしまったからといって、即謡曲
中でも遊女が死んだと扱ってしまってもよいものかという疑問も残っ
てしまうのである。二点めは、遊女の救済願望に僧が手をさしのべ
ている——シテの遊女をワキ僧が救済——である。確かに、江口の
遊女は後場の川梢遙で罪業迷蒙の身であることを語っているから、
心のどこかでそのような罪業深い身の救済を願っているのかもしれ
ない。だが実際のところ、僧は彼女を救済していない。このことは、
後場の棹の歌以降の詞章を見れば一目瞭然である。僧は、江口の遊
女の川梢遙をひたすら傍観しているのみである。傍観者たる僧が、
遊女に対していかなる救済の手をさしのべているというのだろうか。
仮に遊女が僧に救済されているのなら、当然その喜びや感謝の念が
詞章上に表れてくるはずだが、一体どこにそれが見出せるだろう。
このように考えてみると『江口』において、僧は遊女に救済の手を
さしのべておらず、シテ自身も特に救済を願っているわけではない
ことは明らかである。むしろ、シテによるワキの救済と考える方が
適当であろう。そして『江口』のこの救済の論理は、通常の、女人
往生を扱っている謡曲の救済のパターンとは、大きくその性格を異
にしているといえるだろう。

(五)「江口」の救済の図式

以上、『江口』の作品研究を進めてきたが、最後に主題をまとめていきたい。

『江口』には、四つの救済が盛り込まれていた。そのうちの二つの救済は、江口の遊女が普賢菩薩に化現したことに関連する「シテによるワキの救済」及び「普賢菩薩の衆生教化」というテーマの表れであった。そしてこの論拠となっているのが、詞章②で述べた月と、観普賢菩薩行法経である。月はそれ自体が真如の月として衆生の迷妄を晴らし、かつシテの衆生救済の方便ともなっていた。観普賢経は、その教えそのものが構想に盛り込まれ、普賢菩薩の衆生教化の論拠となっていたのである。このように偶然にも、月という言葉を追って得た主題と、観普賢経という經典を手がかりに得た主題は一致している。前者は主に個人の感性によって解釈も揺れ動くものだから、「月＝真如の月」という結論は、あくまで私の主観によるものである。しかし、この詞章を追って得た主題と後者の論理的主題との一致は、感覚的にのみならず、理論的にも遊女から普賢菩薩への化現が不自然でないことの表れになっているのである。故に、この二つの論拠をもとに今一度『江口』を見ると、美しい詞章の間から先のテーマが見え、遊女の普賢菩薩への化現も、ごく当たり前のことと納得できるのである。実は、この納得できるということが重要なのである。これは私の推測だが、作者の中にワキ僧のみならず観客をも救済したいという意識があると考えられないだろうか。観普賢経に基づく普賢菩薩の衆生教化・済度は、観客にとってもある効なものであり、結果として観客までも教化することにつながっていくのではないかという気がしてならない。教化といっても悟りに到るといふ大げさなものではなく、何か些細なことでも新しい発

見・見方ができたというだけで、その役割を果たしたと言えるだろう。また、御利益譚でも成仏譚でもないのだから、妙な有難味を覚える必要もないのである。もちろん、これが真の目的という訳ではないが、結果的にこういう見方もできるということを提案しておきたい。

『江口』の残り二つの救済は、通常の救済のパターンとは正反対なものである。一つは、「遊女（女人）による僧の救済」である。既に第二章でまとめたように、通常は僧が成仏できずにいる女人を供養によって救済するというのが多いのだが、『江口』では逆に遊女が迷える僧を救済していた。俗の側から聖職者への救済ということに注目したい。二つめは、「女人が男性を救済する」ということである。第一章を参照してもらえば分かるように、女人は罪深く、救済されるのが難しい存在であった。ところが、そのように通常は男性側からの救済をひたすら待ち願うことしかできないはずの女人が、反対に男性を救済しているのである。これら二つの救済は、通常の救済の理念を覆すものであり、『江口』に特異性を持たせているのである。

こうしてみると、『江口』がかなり宗教臭く、重々しいテーマを全面に打ち出しているような曲だと誤解されてしまうかもしれないが、曲全体の印象は、水・月といった言葉が戯れ、とても美しい詞章になっており、私達に実に様々なイメージをもたらしてくれている。（詳しくは、詞章①②参照。）これらの言葉や言葉のもたらすイメージが、テーマを覆い、『江口』の美しさや華やかさを前面に押し出すことを可能にしているのであろう。

『江口』は一見、女人成仏を主題とする謡曲というジャンルに、

何のためらいもなく収められてしまいそうな曲である。しかし実は、『江口』のこの救済の論理・衆生教化といったテーマからも分かるように、女人成仏の謡曲という枠にはめることが難しい、いや、枠にはめるのが不可能なほど、スケールの大きな曲であることは間違いないであろう。

おわりに

「なぜ、江口の遊女は普賢菩薩になったのだろう」という私の疑問は、『江口』の特異な救済の図式を明らかにすることで解消された。

第二章で述べた通り、女人成仏の謡曲の救済の典型的パターンは、ワキ僧による女人救済であった。

だが『江口』においては、そのパターンは全く適用されておらず、反対に女人が僧を救済してしまっていた。『江口』は、表層部では遊女による僧の救済、深層部では普賢菩薩による衆生教化という二つの大きなテーマ——二重の救済の図式——を持つ曲であったのだ。なのに『江口』には、宗教臭がない。そこに『江口』の美しさ及び謡曲作者の功があるのだろう。(了)

(注1) 筆者が大学三年の時に『江口』の作品論をまとめたレポートより抜粋。

(注2) 『日本女性史』第二巻・中世(東京大学出版会刊)による。

(注3) 『日本思想大系 法然一遍』(岩波書店刊)による。

(注4) 「女人成仏の謡曲」として扱われることの多い曲を取り上げた。

(注5) 「謡曲と女人成仏」(『金剛』六七号)による。

(注6) 『日本歴史地名大系 第二十八巻大阪府の地名』(平凡社刊)による。

(注7) 『山家集』にはこの和歌の贈答は、「世の中をいとふまでこそかたからめかりのやどりを惜しむ君かな」返し、「家を出づる人と聞けばかりの宿に心とむなと思ふばかりぞ」とある。『新古今和歌集』及び『沙石集』は、謡曲と同じ和歌。

(注8) 『撰集抄』『古事談』『十訓抄』等に見られる。

(注9) 『仏教を読む④ ほんとうの道』(法華経) 中村端隆著(集英社刊)

(注10) 『女の能の物語』(淡交社刊)より引用。

(注11) 『日本民俗語大辞典』(桜楓社刊)の「水」の項目から、部分的に引用。

(注12) 『文化人類学辞典』(弘文堂刊)の「川」の項目から、部分的に引用。

(注13) 『能百番を歩く』の「姨捨」の冒頭より引用。

(注14) 『日本仏教語辞典』(平凡社刊)

(注15) 『謡曲集上』(新潮社刊)の「江口」の頭注の解釈によると、「月が在俗時代からの友であるからには、出家した現在、世俗と断絶した世界とは一体どこにあるのだろうか」とある。

(注16) 注15と同様。

(注17) 『仏教文化辞典』 (佼成出版社刊)

(注18) 法華三部経とは『無量義経』一卷、『妙法蓮華経』八巻、『観普賢菩薩行法経』一卷を合わせた十巻を言う。

(注19) 岩波文庫本による。

(注20) 『日本仏教語辞典』によると、布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧の六つの波羅蜜を言う。

(注21) 庭野日敬著 (佼成出版社刊)

(注22) 筆者は『大日本仏教全書 第六巻経疏部六』仏説観普賢菩薩行法経を参照した。

(注23) 『新訂増補国史大系』十八巻の『古事談』第三・僧行性空見生身普賢事 参照。

(注24) 注23と同巻の『十訓抄』第三不可侮人倫事・性空上人見現身普賢菩薩事 参照

(注25) 岩波文庫本『撰集抄』性空上人発心并遊女^{ナム}拜事 参照。

(注26) 「能 江口の〈江口の君〉——顕現する普賢菩薩——」『国文学』より抜粋。

(注27) 「江口のキリについて」『鎮仙』三五四号より抜粋。

(注28) 『猿楽能の考察』「『江口』の構造」より抜粋。

(注29) 「聖俗のたわむれとしての芸能——遊女・白拍子・曲舞の物語をめぐるて——」『大系 仏教と日本人 芸能と鎮魂』より抜粋。

(注30) 『遊女の文化史 ハレの女たち』(中公新書刊)より抜粋。

注で記した以外にも多数の参考文献があるが、ここではそのうちの一部をあげておく。

『国文学 解釈と鑑賞』平成三年九月号

『女人住生思想の系譜』笠原一男 (吉川弘文館)

『日本女性史研究文献目録』女性史総合研究会 (東京大学出版会)

『日本古典文学と仏教』石田端磨 (筑摩書房)

『女人住生——日本史に見る女の救い』小栗純子 (人文書院)

『謡曲集二 風姿花伝』 (小学館)

『日本女性史』 (評論者)

『謡曲百撰』里井睦郎 (笠間書房)

『謡曲全集』野上豊一郎 (中央公論社)

『謡曲大観』佐成謙太郎 (明治書院)

『能楽全書』第一巻 野上豊一郎 (創元社)

『謡曲集』上・中・下 伊藤正義 (新潮社)

『能・狂言辞典』西野春雄 (平凡社)

『能の辞典』戸井田道三 (三省堂)

(うえの けいこ・一九九二年卒)